藤ノ木古墳の秘密
物部蘇我戦争の核心を暴く

清水守民

一九八五―八八年に発掘された藤ノ木古墳は、その超豪華な副葬品などから「大王級の人物」であったことが想定されています。築造期は六世紀後半が推定され、被葬者は「穴穂部皇子・五八七年没」や「崇峻天皇・五九二年没」などが候補に挙がっていますが、絶対的証拠がなく確定されていません。

で、実はこの人物の特定をもって、当時の「物部蘇我戦争」の背景・実態・結末・その後の歴史展開の把握が、『記紀』の虚実により隠された史実」の解明も含めてより鮮明になること、それを記してみます。

■藤ノ木古墳の被葬者を暴く

なぜ被葬者を特定できないのか、その最大の原因は石棺に納められた二体の人骨とそれに付随する装飾品にありました。**図1**をご覧ください。主体は左のガッシリした人骨と男王風の装飾品だったのですが、右の副体の人骨はキャシャで女装品を纏っていました。

当初の見解では被葬者は「大王級の男性とその妻」でしたが、その後に副体骨が「男性のもの」との見解が示された結果、五八七年に蘇我馬子により一緒に殺害された「穴穂部皇子と宅部皇子」（**図2**）との説が俄然有力視されることとなりました。

ところが「女装の男性」にはかなりの抵抗があったようで、森浩一さんなどは最後まで女性説にこだわっていたようです。

ここで書紀の記述を詳しく読み込んでみましょう。

「宅部皇子も同時に殺害」の理由は「穴穂部皇子と親しい仲であった」から。先ず殺害のターゲットは穴穂部皇子であったこと、それから宅部皇子も一緒に殺害したのは彼らが「切っても切れない仲」で、むしろこの時が目的を遂げるための絶好のチャンスだったこと。殺害は夜半、つまり寝込み時の暗殺でした。この時に二人は一緒にいたのです。なにも「親しい仲」が「親友」だけのこととは限りません。それと書紀がこのことを特筆しているのは大変「意味深」ですね。

昨今のＬＧＢＴ問題などは今に始まったことではなく古代からもあることです。端的に言えば、穴穂部皇子と宅部皇子は「愛人関係」にあったのでしょう。

日本書紀は時の政権の正統性を誇示するための「虚実入り混じった史書」ですが、この段では考古事実との見事な整合性がうかがわれます。

こうして藤ノ木古墳の被葬者が「穴穂部皇子」であることを特定することで、穴穂部を担いだ物部守屋と崇峻を担いだ蘇我馬子の政権戦争の思わぬ実態が見えてくることを次に書き進めて行きます。

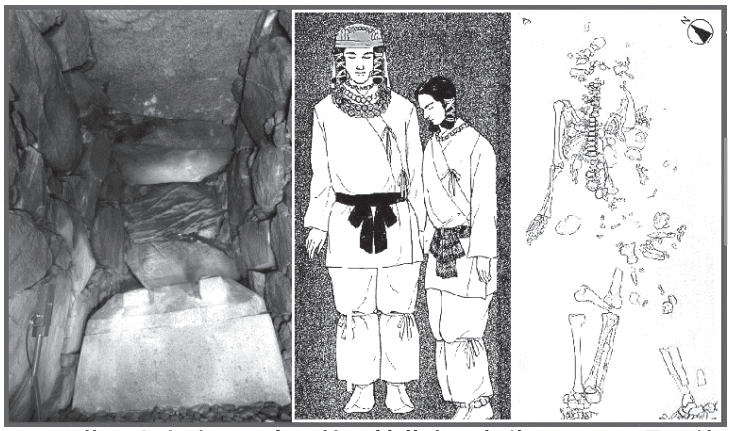


図１. 藤ノ木古墳／石室石棺―被葬者（想像図）―人骨２体

図２. 日本書紀／物部蘇我戦争勃発・穴穂部皇子の殺害

五八七年　用明死去直後◆書紀

泊瀬部天皇　崇峻天皇

穴穂部皇子の死

泊瀬部天皇は、天国排開広庭天皇（欽明天皇）の第十三子である。母を小姉君と申しあげる（稲目宿禰の女である。すでに上文（欽明二年三月条）に見えている）。二年の夏四月に、橘豊日天皇（用明天皇）がお崩れになった。

五月（用明天皇二年）に、物部大連（守屋）の軍衆は、三度動きをおこした。大連はもともと他の皇子たちを無視して穴穂部皇子を立てて天皇にしようとしていたが、遊猟にことよせて擁立することをはかり、ひそかに人を穴穂部皇子のもとに遣わして、

「皇子と淡路で狩猟をしたいと思います」

と申しあげた（皇子を河内の守屋の家に迎えようとしたか）。しかし、この陰謀はもれた。

六月の甲辰の朔庚戌（七日）に、蘇我馬子宿禰らは、炊屋姫尊（敏達天皇の皇后、のちの推古天皇）を奉じ、佐伯連丹経手・土師連磐村・的臣真噛に詔して、

「おまえたちは兵備を整えて急行し、穴穂部皇子と宅部皇子とを殺せ」

といった。この日の夜半、佐伯連丹経手らは穴穂部皇子の宮を囲んだ。衛士（兵士）がまず楼の上に登り、穴穂部皇子の肩に斬りつけた。皇子は楼の下に落ち、そばの建物に逃げこんだが、衛士たちは燈火をかかげて殺した。辛亥（八日）に、宅部皇子を殺した（宅部皇子は、檜隈天皇（宣化天皇）の子、上女王の父である。しかしいまだ詳かでない）。穴穂部皇子と親しい仲であったので、殺されたのである。

■大和河内地域の物部支配を暴く

藤ノ木古墳は平安期には「御陵（ミササキ）」と呼ばれ、斑鳩の里人により営々と護られてきたそうです。

図3はその古墳構造、羨道ラインが「南東三十六度」で、**図4**の二連五芒星の頂点を結ぶラインと直交です。

さてこの古墳のある斑鳩里は**図4**のように、現法隆寺の下に密かに隠された「物部氏の財宝を納めた」と言われる三伏蔵と鯛石が形成する「二連五芒星」を中心にして「北西十八度」の傾きで東西に拡がる区画都市構造です。で藤ノ木古墳はこの区画にピタリと乗っており、これは物部蘇我戦争で勝利した厩戸王が斑鳩に乗り込んで宮を造る以前のこと、つまり斑鳩里の原型は物部氏の手によるものだと言えます。で、西里の穴穂部皇子を祀る藤ノ木古墳に対応する東里には穴穂部間人に関する遺跡が展開しており、二人は欽明天皇と小姉君の間に生まれた姉弟。そして間人は物部の本拠地・八尾の「穴穂」で養育されており、今にその神社があります。穴穂部皇子もこの物部氏に養育された可能性が高い。

図5は大和河内の二連五芒星十環ランドプランとその拠点史蹟のマップですが、この北域に拡がる聖徳太子系寺院の法隆寺・大聖勝軍寺・四天王寺の地は、戦闘以前はすべて物部氏の所領だったことが窺われ、おそらく大和川以北は物部氏の支配域だったのでしょう。

そして中でも斑鳩里は、隠された物部系所産（区画都市構造や謎の二連五芒星配置施設など）からしてもおそらく物部氏にとっての最重要拠点だったようです。また逆に地勢上、飛鳥エリアを拠点とする蘇我勢力が真っ先に急襲を仕掛ける最短の地でもありました。

この斑鳩の里人が営々と崇拝する藤ノ木古墳の被葬者はそこの最重要人物。次の項ではこの「天香子」と称せられた穴穂部皇子の実体を追ってみましょう。

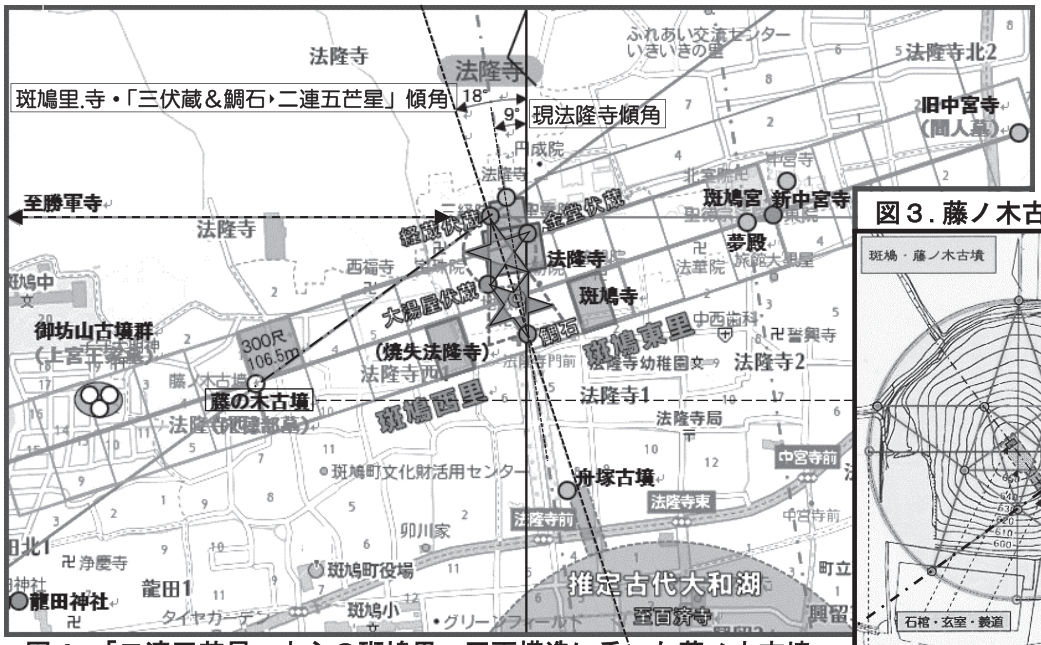


図３．藤ノ木古墳の構造

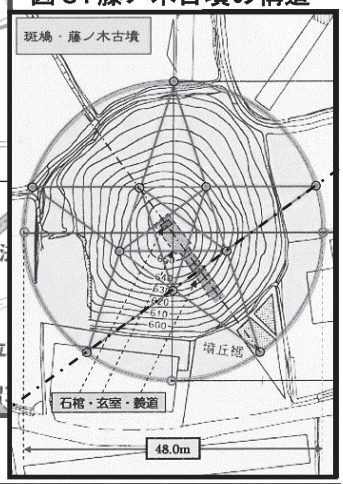


図４．「二連五芒星」中心の斑鳩里・区画構造に乗った藤ノ木古墳

図５．大和河内・二連「五芒星十環」ランドプラン拠点に乗った物部関連史蹟

■日本書紀の系譜改竄を暴く

物部蘇我戦争の実態を把握するポイントは、守屋と馬子の政治的思惑や確執を押えるとともに、彼らが担いだ王族間での王位継承争いも焦点になってきます。

図6は欽明と婚姻関係を結んだ6人の女性のうち今回の王位継承争いに絡む、書紀の記述では蘇我稲目の女子とされる堅塩媛とその妹の小姉君の系譜についてクローズアップしたものです。

「書紀の記述では」と書いたのは、実は古事記では「小姉君は堅塩媛の姨（おば）」と書かれおり、重大な相違が見られます。さてどちらが正しいのでしょうか。書紀によれば蘇我小姉君系の中で「守屋の担ぐ兄・穴穂部皇子が殺され、馬子の担ぐ弟・崇峻が王位継承を果たした」とする「蘇我系内での王権争い」となりますが、ここに腑に落ちない考古事実があります。堅塩媛系が蘇我氏の象徴と言われる「方墳」なのに対し小姉君系は全部「円墳」なのです。それと和風諡号の特徴として堅塩媛系が〔用明・橘豊日、推古・豊御食炊屋姫、厩戸皇子・豊聡耳〕と「豊」を用いているのに対し、小姉君系では唯一穴穂部皇子が〔天香子〕と呼ばれていました。この名前、そう大和物部氏の祖とされるニギハヤヒの子が〔天香山命〕、どうも小姉君系は蘇我系とは異なる物部系の臭いがプンプンします。

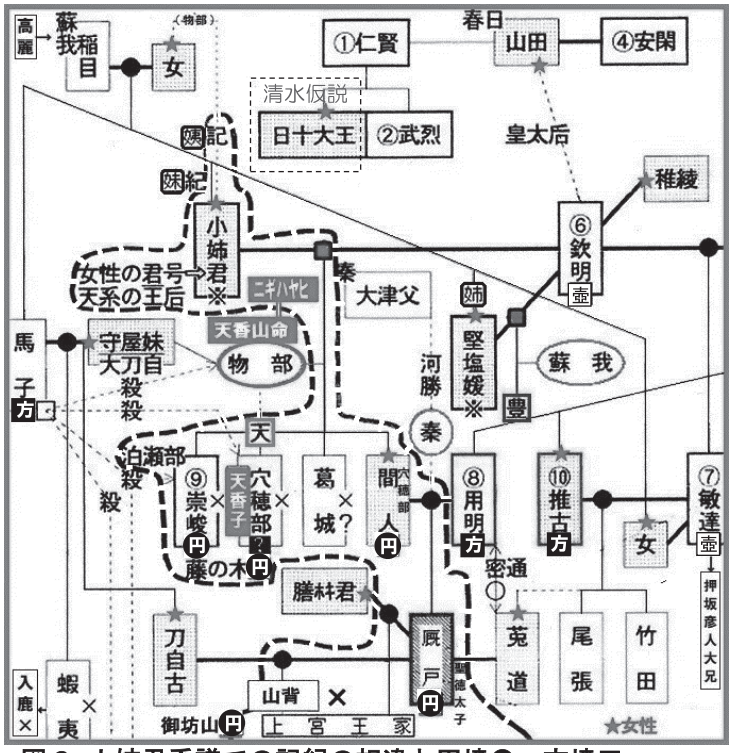


図6．小姉君系譜での記紀の相違と円墳円・方墳方

図7．物部・国神と蘇我・仏法の対立

五八七年　用明死去直前◆書紀

天皇病む

二年の夏四月の乙巳の朔丙午（二日）に、磐余の河上で新嘗の儀を行なわれた。この日天皇は病にかかって宮にお帰りになり、群臣がこれに侍した。天皇は群臣に詔して、

「自分は仏法に帰依したい。おまえたちはこのことを議するように」

といわれた。群臣は朝廷に入ってこのことを議した。物部守屋大連と中臣勝海連とは、詔の議にたがい、

「国神に背いて他神を敬うということがあろうか。このようなことは今まで聞いたことがない」

といった。これに対し蘇我馬子宿禰大臣は、

「詔に随って天皇をお助けすべきだ。誰がそれ以外の計略を考えよう」

といった。その時、皇弟皇子（皇弟皇子とは穴穂部皇子、すなわち天皇の庶弟である）が、豊国法師（名は伝わらない）を従えて内裏に入った。物部守屋大連はこれを横目でにらみつけ、大いに怒った。すると押坂部史毛屎が急いでやって来て、大連に耳うちし、

「今、群臣があなたをおとしいれようとしています。あなたの退路を断ってしまおうとしています」

といった。大連はこれを聞くや、すぐに阿都（河内国渋川郡跡部郷、現在の大阪府八尾市）に退いて（阿都は大連の別業のあった地の名である）人を集めた。中臣勝海連も自分の家に軍衆を集め、大連を助けようとして、太子彦人皇子（敏達天皇の皇子押坂彦人大兄皇子）の像と竹田皇子（敏達天皇の皇子）の像とを作って厭ったが（像を傷つけてその死を祈る）、ややあって事の成功しがたいことをさ

「用明死去直前」の書紀の記述です。

用明の夏四月新嘗の儀は何か「駆け込み即位」のようで、即、病に倒れ仏教への帰依を宣言します。これに神道系の守屋と中臣氏が猛反対、これを馬子が遮ります。この時に病気治療か仏教帰依のためか皇弟皇子が連れてきたのが豊国法師（＊また「豊」字）で、これを守屋が睨みつけます。で、この皇子を書紀は穴穂部と記しますが彼は守屋が担ぐ皇子なのでこれはおかしい、多分後に敵対する弟の崇峻のことでしょう。

これが物部蘇我戦争勃発の契機となりますが、これはどうも「仏教の国教化を図り物部氏を排除して政権を掌握」しようとする蘇我馬子のシナリオだったのではないでしょうか。この馬子の陰謀知略の推理を次の段でお話しします。

ここで俄然クローズアップされてくるのが古事記の「小姉君は堅塩媛の姨」との記述です。※ちなみに「君」称は「姫・媛」とはワンランク上の表現だそうで、隋書でお馴染みのアメ・タリシホコ・アハキミの妻がキミ。

ここで古事記と考古事実に従って系譜を読み替えての史実解釈を試みてみましょう。「小姉君系は蘇我系とは別の『円墳を継承する』氏族文化を受け継いでおり、物部蘇我戦争は天系・物部氏と豊系・蘇我氏の激突だった。馬子は用明の次の後継と目される「天香子」穴穂部皇子（＊欽明は「天国押開広庭」）を殺害し、弟の崇峻を後継に据えることで天系のメンツを保ちながら物部氏の所領をまんまと手に入れた」。

さて「物部守屋と蘇我馬子の激突」のその直接原因を探ってみましょう。図7は守屋と馬子の確執を記した

■蘇我馬子の陰謀知略を暴く

蘇我馬子（五五一？～六二六）は敏達期に大臣、当時大流行した疫病（今のコロナ禍のよう）対応で仏教主導の馬子は、神道主導の物部守屋大連と激しく対立しますが、結局仏教排斥を被ります。そんな中敏達が急逝、急遽馬子の影響力が強まる堅塩媛系の用明が即位しますが、小姉君系の穴穂部皇子や物部守屋は承服しなかったようです。で今度はたちまち用明が発病し、仏教帰依を表明。ここに守屋と馬子の対立は最高潮に達し、用明死去で物部蘇我戦争の勃発に至ります。（図８）

当時の物部勢力は強大で他の豪族が束になっても勝てないほどだったようです。ここで馬子は一計を案じます、泊瀬部皇子（崇峻）を抱き込むこと。小姉君系の穴穂部皇子が即位すれば弟の彼は邪魔な存在として扱われることになるでしょう（権力保持のための兄弟殺しは古代によく見かけることです）。馬子はこのことで彼に穴穂部への叛意を促し、また成功の暁には「大王位」を約束したのでしょう。

泊瀬部が豊国法師を内裏に引き入れたのは彼が仏教信奉の蘇我側についたことの徴で、守屋はこの時彼の叛気を察知し、すぐに阿都に戻って戦闘態勢を敷きます。

馬子の更なる策略は先ず物部勢力の「頭」である穴穂部を一気に潰し、物部の大和拠点・斑鳩を征圧すること。ここを抑えて高安に進軍すれば阿都はもう眼下、信貴山にはこの時聖徳太子に協力したとの伝説が残っています。こうして馬子は物部氏の築いた五芒星結界線を逆利用することで大勝利を収めることとなります。

で、謀略の最後の締めが不要となった崇峻の抹殺。これで政権は推古・堅塩媛系の世となり、完全なる「蘇我馬子の天下」が訪れます。

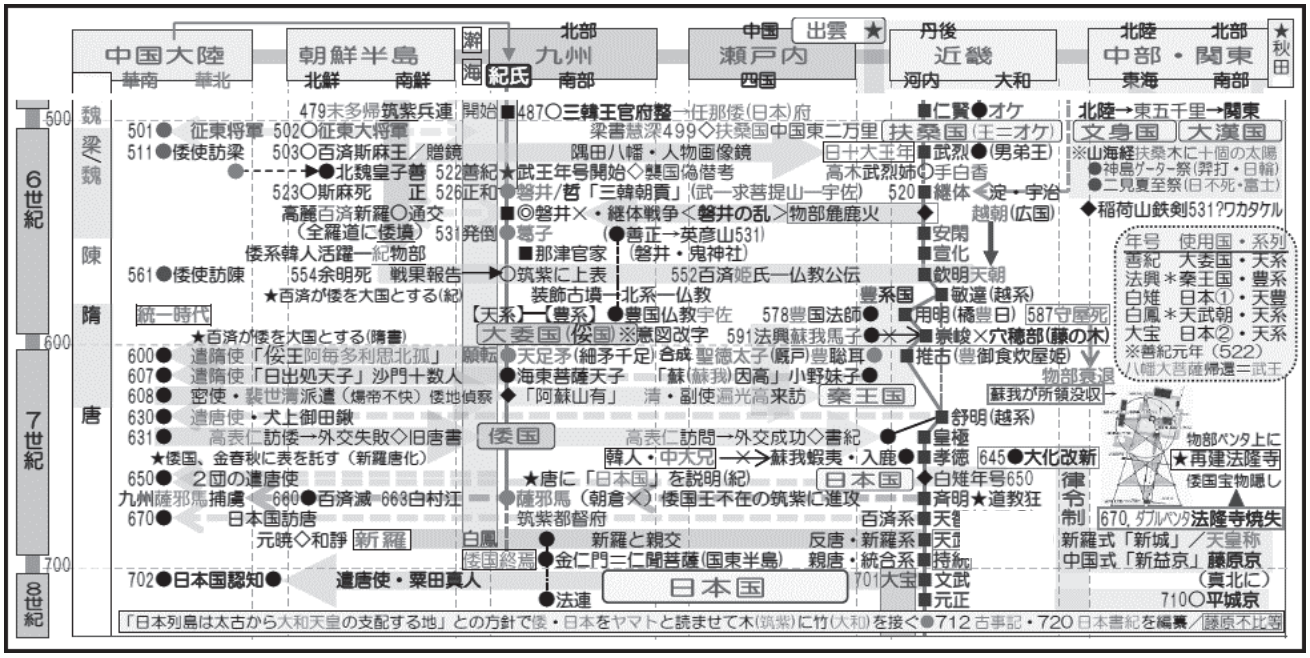
で大事なのはその戦後処理で、先ず財産権では守屋の妹を妻にすることでそれを掌握。それから堅塩媛系と小姉君系双方の血を引く用明・間人の「運命の子」厩戸（聖徳太子）を斑鳩の地に赴かせ、仏教による鎮魂・寧撫を図ります（斑鳩寺）。その痕跡が現法隆寺にひっそりと眠っていること、最後にお話しします。

五七二―六〇一年◆書紀年表

五七二	敏達	一	四月、渟中倉太珠敷皇子、即位する。物部弓削守屋大連を大連とし、蘇我馬子宿禰を大臣とする。五月、船史の祖辰爾、鳥の羽に書かれた高麗の表疏を読解する。
五七四		十三	九月、百済より仏像二軀がもたらされる。蘇我馬子、その仏像二軀を請じて、使を四方に遣わして、修行者を求める。
五七五		十四	三月、物部弓削守屋大連、寺塔・仏像・仏殿を焼く。八月、天皇、崩御する。九月、橘豊日皇子、即位する。磐余に宮を造り、池辺双槻宮という。蘇我馬子宿禰を大臣とし、物部弓削守屋連を大連とする。
五八六	用明	一	五月、穴穂部皇子、物部守屋大連と兵を率いて磐余の池辺を囲み、敏達天皇の寵臣三輪君逆を殺す。
五八七		二	四月、天皇、三宝に帰す詔を発し、これをめぐり群臣の間に紛議が起こる。天皇、崩御する。七月、蘇我馬子宿禰大連が諸皇子・群臣にすすめて物部守屋大連を滅ぼす。八月、泊瀬部皇子、即位する。
五八八	崇峻	一	この年、百済国、仏の舎利・僧・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工を献じる。蘇我馬子宿禰、戒を受ける法を百済僧に問う。飛鳥衣縫造の祖樹葉の家を壊して法興寺を造る。
五九一		四	八月、天皇、任那復興の詔を発する。十一月、紀男麻呂宿禰らを大将軍とし、二万余の軍を筑紫に派遣し、新羅・任那に使者を遣わす。
五九二		五	十一月、蘇我馬子宿禰、東漢直駒に天皇を暗殺させる。十二月、豊御食炊屋姫皇女、即位する。
五九三	推古	一	四月、厩戸豊聡耳皇子（聖徳太子）を皇太子とする。この年、四天王寺を難波の荒陵に造る。
五九四		二	二月、三宝興隆の詔が出され諸臣が競って仏舎を造る。
六〇〇		八	二月、新羅と任那が交戦する。天皇、任那を救おうとし、境部臣を大将軍とし一万余の軍を率いさせ、任那のために新羅を討つ。新羅は降伏したが、また任那を侵す。
六〇一		九	二月、皇太子、宮室を斑鳩に造る。十一月、新羅を攻めることを議す。

図８．蘇我馬子・大臣時代前期の書紀記録

図９．東アジア視野での日本列島多元古代史年表（６～７世紀）



■現法隆寺に眠る藤ノ木古墳と斑鳩寺の物語

現法隆寺は天武・持統時代にまるで物部時代の謎の二連五芒星形置石遺跡（実見できるのは南大門前鯛石）を覆い隠すかのように密かに造られた寺院で、その金堂にはそれぞれが立派な本尊であるかのような仏像が三体（釈迦三尊・阿弥陀如来・薬師如来）納められています。そのひとつ、釈迦三尊像の台座裏には図10.のような墨書がしたためられており、「藤ノ木古墳の被葬者を意識したもの」との見解が有力です。でこの台座はどこかの建造物からの「転用」とされており、この文言と深い関係にある寺院と言えば「斑鳩寺」でしょう。

先に述べたように厩戸（聖徳太子）が「物部王者の鎮魂のため」に斑鳩に赴いたとすれば、まさにピッタリの文言です。

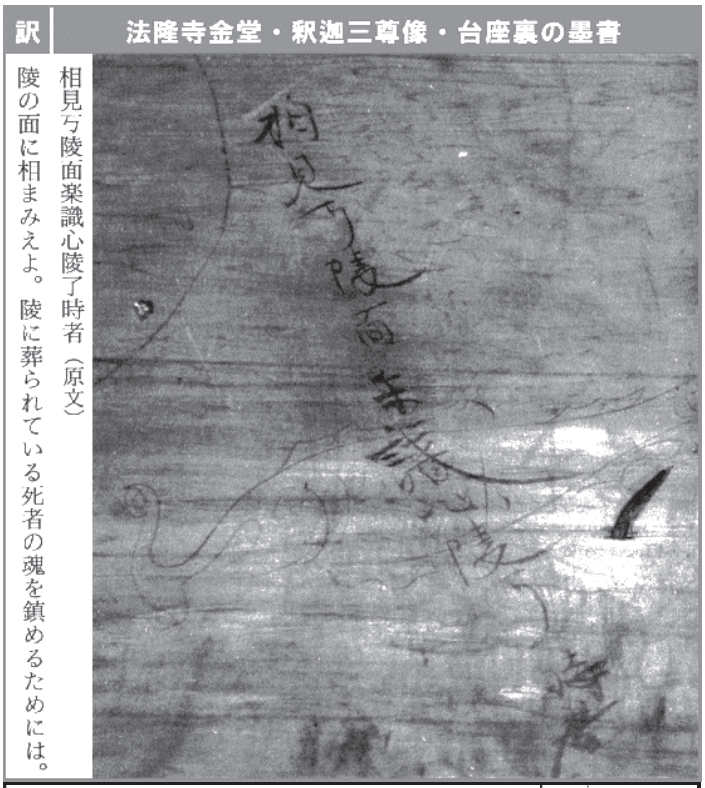
図10.下はその藤ノ木古墳と斑鳩寺の位置関係を示したもので、これが斑鳩寺金堂の「一枚板の西扉」に書かれていたとすれば、位置取りも素材性も更にシックリときます。天武・持統は、物部・蘇我の築き上げた斑鳩の歴史を覆い隠そうとしながらもそれを全く消してしまった訳ではなく、その物語は現法隆寺の中にコッソリと隠し込んだ、ということでしょうか。

また阿弥陀如来坐像の台座裏にも同じく墨画がしたためられていました（図11.）。この墨画、なんと経蔵にある観勒像とソックリです。観勒は百済から渡ってきた僧で聖徳太子の先生、「日本陰陽道の祖」と言われる人です。観勒はこの斑鳩の地に既に五芒星文化があることを知って、さぞビックリしたことでしょうね。

さて、この観勒像はずっと後の平安時代の作で、多分蘇我氏に滅ぼされた物部氏の史産「二連五芒星」の秘密がヒッソリと語り継がれていた結果なのでしょう。そしてこうした密かな伝承が「物部財宝伝説」のような形に姿を変えて現在も息づくことになるのでしょうか。で、ひょっとしたら「物部氏の財宝」とは、あの藤ノ木古墳の石棺に納められていた超豪華な副葬品のことなのかも知れません。

◆はじめに「日本書紀は時の政権の正統性を誇示するための虚実入り混じった史書」と書きましたが、それが具体的にどの部分がそうなのかを指摘するのは、考古学やその他の科学的論理的分析も結集させての大変な作業です。今回はそれを思い切って提示してみました。少しでも私たちの知見が拡がれば幸いです。

（東大阪文化財を学ぶ会）



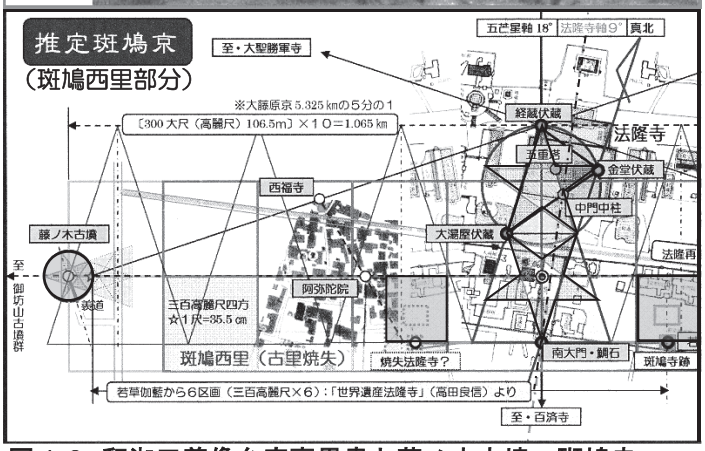


図１０．釈迦三尊像台座裏墨書と藤ノ木古墳―斑鳩寺
図１１．阿弥陀如来台座裏墨画と観勒像